

見聞記『航米日録』に見える「行頭」をめぐって ——幕末武士の近代語——

浅野敏彦

1. はじめに

石井研堂（1944）『明治事物起源』は、【資料1】のように述べて、「停車場の幼名」を明治15年の例まで出典とともに21例をあげている。今、【資料2】にその中から出典を省いて、幕末に見られる「停車場の幼名」を示す。

【資料1】

（三八）鉄道と停車場の幼名 汽車の鉄道と停車場は、本邦にかつてなかりしものだけに、各人各様に命名し、それが今日の定名となるまでには、学者非学者の別なく、よほど苦しみし跡を看取さる。いま見るに従ひて、これを拾録す。（第九編交通部「汽車の始め」）

【資料2】

蒸気車の小屋、車舎、蒸気車行頭、蒸気車仕出役所、蒸気車問屋場、蒸気車を仕立す見世、立場、蒸気車会所、蒸気車屯所、蒸気車公司、蒸気車場

本論文で問題にするのは、石井研堂が、玉虫左太夫『航米日録』と市川清流『尾蠅欧行慢録』の例を引く「蒸気車行頭」である。『航米日録』に見える全例を【資料3】として示す。以下、『航米日録』の引用は、沼田（1974）による。引用にあたっては、校注者による振り仮名は除いた。また、以下の他の文献の引用の下線は引用者が施したものである。

【資料3】

- ①是ヲ去り六七町許行キ火輪車^{トヒヤ}行頭アリ、数十車ヲ列ス。毎車ニ屋台如キモノ六七個接続シ、装ヒ極メテ美麗ナリ。是ヨリ車鋏道アリテ諸方へ通ズ。（巻4、4月14日）
- ②辰後旅館ヲ発軔シ（中略）、東ニ向ヒ一五六町ニシテ一巨家アリ、高屋ニシテ長シ。此蒸気車行頭ナリ。大小ノ蒸気車数十個、其内美麗ニシテ長サ七八間ノ屋台五個接続シタル大車アリ、是ニ乗り発ス。（巻4、4月20日）
- ③此府巷門ニ蒸気車行頭アリ。是又高屋ニシテ二層ノ石門アリ。（巻4、4月20日）
- ④巳後旅館ヲ発シ、東北十五六町許ニシテ蒸気車行頭ニ至ル、是又高屋ナリ。此処ヨリ蒸気車ニ乗ル。四個ノ屋台接続シテ、車上ノ装ヒ中央ニ我国ノ旗章ヲ記シタル幕ヲ張り、其他一トシテ美ナラザルハコトナシ。（巻4、4月21日）

- ⑤又行クトコ数里ニシテフユトルヒヤニ着ス。ホールトモルヨリ是迄九十九里（亜ノ里法）ト云フ。纔ニ四時二十四「ミニート」ニシテ達ス。又蒸気車行頭ニ至ル。是又高屋ニシテ且ツ長シ。（巻4、4月21日）

【資料3】をみるに、「火輪車（蒸気車）」が数十両停まっていた、高い建物がある施設を「火輪車行頭」「蒸気車行頭」と言っていて、石井研堂が〈ただ、これは、中間駅ではなく、首駅をいひしなり〉と指摘するように、鉄道ターミナルを指して表現したものと思われる。玉虫ら一行は、パナマ運河が出来ていなかったために、パナマからパナマ鉄道¹⁾に乗って「アスヘンワル」（沼田1974では現在のコロンとする）に向うが、途中「午飯ヲ喫」したサンハフローニは、「此処ハ我国ノ立場ト称スルモノ、如シ」として、【資料3】にある「行頭」とは違ったものとして捉えている。木村鉄太は「サンハフローニ」での休息を「四時半。一-^{タテバ}傳舎ニ至ル。米利堅人。之ヲ守ル。皆車ヲ下リ。午飯ス。」と記している²⁾。なお、木村は玉虫が「行頭」と記した鉄道施設を「通運所」としていて、新潮社から出された自筆本とされる写本には「ウンソウヤクシヨ」と振り仮名がみえる（【資料5】④）。

「行頭」は『日本国語大辞典第二版』³⁾には「ぎょうとう」として立項されているが、①文章などの行のはじめ。②修行や修行僧の監督の任にあるもの」とあって、玉虫の「行頭」につながる語義記述はない。また、『中国語大辞典』（角川書店、1994年）、『CD-ROM版漢語大詞典』（商務印書館、2007年）、『現代漢語詞典（第二季）』（商務印書館、1980年）、『現代漢語詞典補編』（商務印書館、1989年）、『中日大辞典増訂第二版』（大修館書店、1987年）、『岩波中国語辞典』（岩波書店、1963年）には立項されてはいるが、『航米日録』に見えるような「停車場」の語義記述はない。『中国語大辞典』で代表させて、その意味記述を要約して示せば次のとおりである。

【資料4】

- ①演劇用衣装。舞台衣装。②広く服装の意。③大工など職人の道具。
④唐、宋代に使われた「けまり」

また、日本の近代訳語に大きな役割を果たしたと言われる（森岡健二1991）ロブシャイドの『英華字典』（4冊本、1866年～1869年）には、“station a railway”に「火輪車歇之處」とある。なお、中国の例については後述する。

2. 玉虫以外の使節団員の記録

日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』（風間書房、1961年）、日本史籍協会編『遣外使節日記纂輯』（東京大学出版会〔覆刻〕、1971年）所収の記録、および、木村鉄太『航米記』（新潮社、1974年）、佐野鼎『万延元年訪米日記』（金沢文化協会、1946年）によってみるに、万延元年遣米使節団の他の記録には「行頭」は見出すことはできない。玉虫が「行頭」を用いて記述している鉄道施設＝ターミナルについては、各々下記のように記している。『万延元年遣米使節史料集成』は『遣米』、『遣外使節日記纂輯』は『遣外』と略記し、所

収の巻数は（ ）内に漢数字で示すこととする。なお、①～④、⑥～⑧は同一の「駅」を言ったものである。

【資料5】

- ①蒸気車仕出し場有 ましず（益頭尚俊「亜行航海日記」4月20日、『遣米（二）』）
- ②東方八丁計にして蒸気車に乗移る 此所より蒸気車を出す所なり（佐藤恒蔵「米行日記」4月20日、『遣外（一）』）
- ③蒸気車の小屋は高さに二丈ばかり長さ三十間もあるべし三棟はかりにて中に数車有
（村垣範正「遣米使日記」4月20日、『遣外（一）』）
- ④既ニ驛亭ニ抵リ。車ヲ下ル。蒸気車ノ ウンソウヤクシヨ 通 運 所 ナリ。是ヨリ諸方ニ。蒸気車ヲ出ス。
（木村鉄太『航米記』4月20日）
- ⑤晝九つ時頃ボルトモル府の西南の車驛に着す（佐野鼎「万延元年訪米日記」4月20日）
- ⑥朝ニ。旅館ヲ発シ。車ヲ馳セ。北・門ノ 通運所ニ至リ。蒸気車ニ遷リ。他ノ蒸気車ノ出ヲ待ツ。
（木村鉄太『航米記』4月21日）
- ⑦市中の入口より十余丁にして 蒸気車場 にいたる
（柳川當清「航海日記」4月21日、『遣外（一）』）
- ⑧車馬ヲ馳乗車場ニ至ル（野々村忠実「航海日録」4月21日、『遣米（三）』）
- ⑨夕七時頃ヒレドルヒヤ府の一端なる鐵路の終尾に着す
（佐野鼎「万延元年訪米日記」4月21日）

【資料5】①、及び②の割注が示しているように、彼ら一行が乗り降りしているのは蒸気車の始発駅であり、佐野がいうように「終尾」＝終着駅（⑨）でもあって、今でいうターミナルステーションである。それを、玉虫は「トヒヤ」＝問屋と振り仮名で示したものである。玉虫が【資料3】③、④で書いたのは、それぞれボルティモアの「カムデン駅」（沼田1974）、「プレジデント・ストリート駅」（宮永2005）のことであるが、末尾に示した図1、2に見られるように行き止まりになっていて、通過駅では無いことが明らかである。この鉄道施設を、玉虫は、日本で目にしてきた宿駅制度⁴⁾の「トヒヤ」（問屋）と捉え、「行頭」と漢字表記したのである。③の「行頭」の振り仮名「トヒヤ」は、日本思想大系が底本とした仙台市博物館蔵本で確認したが、巻4が自筆本でないこともあり、玉虫が施したものかどうかは不明とせざるを得ないが、目の前に機関車が数十両留め置かれて、高い建物がある施設は、江戸の品川宿のような「トヒヤ」に置き換えて理解できるものであった。「立場」を使っているのでもあり、「問屋」と漢字表記してもよかったのであろうが、そうすると宿駅制度⁴⁾と全く同一視することになり、馬ではなく、目の前に停まっている西洋の近代を象徴する火輪車と鉄道施設を表現するのには、不適切と思ったものと推測される。そこで、白話語風の「行頭」という表記を作ったのであり、玉虫の近代語であったと言えるものと考えるのである。

蒸気車そのものは、聞いたり読んだりして知識があったであろうし、ペリーが持参した模型の汽車を1854（嘉永7）年に江戸城で走らせた⁵⁾こともあって、使節団の中にいた奉行達の中には見た者もいたと思われる。しかし、汽車が実際にはどのようにして乗客、貨物を運んでいるのかといった、後に鉄道と呼ぶことになる近代的な施設、仕組みを、システムとしてはアメ

リカに来てはじめて見聞したのである。

それを玉虫は宿駅制度に置き換え理解したのである。それは、「通運所」とした木村にしても、「車驛」とした佐野にしても同じである。WikipediaのCamden Stationの頁には「Camden Station in 1865」と説明文がついて、末尾に示した図3が掲載されている。Wikipediaの記述によれば、1865年に、左右に張り出した部分と外側の塔が付け加えられたとあるので、1860年にカムデン駅を見た玉虫が「是又高屋ニシテ二層ノ石門アリ」（【資料3】③）と描写したのは、中央部分だけであつたのであろう。

3. 他の見聞記にみえる「行頭」

玉虫左太夫らの遣米使節団のあとに、竹内下野守保徳を正使とした〈両都（江戸・大坂）、両港（兵庫・新潟）開市開港延期交渉ならびに樺太における日露国境画定交渉のための使節〉が、1861（文久元）年12月22日にヨーロッパに向けて品川を出発する。すでに石井研堂（1944）が指摘しているが、副使松平康直の随行員であつた市川清流（川俣）の著作になる『尾蠅欧行慢録』に複数例の「行頭」が使われている。ただし、豊橋市図書館羽田文庫本の「行頭」に振り仮名は無い⁶⁾。

【資料7】①は、【資料6】②の前半に「行頭」とされたのと同じ「駅」を「仕出場」としており、【資料7】③は【資料6】の③の「行頭」を「問屋」としている例である。また、1863文久三年に横浜鎖港問題折衝のために池田筑後守を正使とした使節団が派遣されたが、その随行員岩松太郎の「航海日記」の例（【資料7】②）も、「駅」「停車場」を「問屋場」とであると理解していたことを示していて、これらの例からも【資料3】①の「行頭」を理解することが出来るのである。【資料7】④は、1865（慶応元）年横須賀製鉄所設立のために英仏に使節団を派遣したときの随行員であつた岡田攝蔵の記録であるが、彼もまた「問屋」と同義の「会所」を使っているのである。【資料8】③は【資料6】③と同じパリ駅を指しているが、やはり、「汽会所」と「会所」を使っているのである。

【資料6】

①午牌後ヨリ旅寓ヲ馬車ニテ出本道ノ蒸氣車行頭ニ至ル此所ハ日々出入ノ蒸氣車數十輛ヲ備置所ニシテ 幅八間ニ長八十間許ノ觀物場ノ如キ一廣屋ニシテ四方ノ鐵路是ヨリ始ル也此傍ニ兩所ニ行旅ノ屯所アリテ即出入ノ群ヲ判ツ也此屯所ニ接シテ一大館アリテ飲食止宿ノ便ニ備フ總テ各國共蒸氣車行頭ハ皆然ルナリ

（市川清流「尾蠅欧行慢録」2月24日、『遣外使節（二）』）

②巳牌前ヨリ旅寓ヲ馬車ニテ發街上看者蟬集ス警衛ノ騎馬三十許銃隊歩卒凡五百許ニテ道路ヲ囲ム南ノ方ニ行十丁餘蒸氣車行頭ニ至ル幅八間長三十間許傍ノ驛館ニ入テ少憩ス（中略）申後「レラン」〈地名〉蒸氣車行頭ニ著此所幅二十間長六十間許盡ク玻璃ヲ以テ張レリ又屋上正面亘六七尺許ノ時辰表ヲ懸タリ尤夜間ハ内ニ燈火ヲ點スル也

（同上、3月7日）

③亥牌巴里斯蒸氣車行頭ニ至

（同上、8月29日、『遣外使節（二）』）

市川清流は白話語に詳しかったこともあって⁷⁾、「駅」を「行頭」と白話語風に捉え、その傍らにある建造物を「驛館」とした。この語は、彼の編んだ『雅俗漢語譯解』には見えないが、『支那小説字解』には「驛館 本陣 ホンノヤド」の例が見える⁸⁾。

【資料 7】

- ①マルセイロン港朝十時出立館より車馬に乗り街中凡拾四五町離れ蒸氣車仕出場あり
(益頭駿二郎『欧行記』3月7日、『遣外(三)』)
- ②○是より前車の著する場所は本朝の問屋場と同じ夜中も野田に人足共眠居る体也○此場所は立場のようなる処にて一軒の小屋あり (『航海日記』2月19日、『遣外(三)』)
- ③仏蘭西パレイス蒸氣車問屋へ寄る十時頃に至り (『航海日録』8月29日、『遣外(二)』)
- ④朝七字^セ驛蒸氣車會所に到朝八字蒸氣車に乘し
(『航西小記』9月21日、『遣外(三)』)

【資料 8】

- ①此所迄蘭より使蕃を出向として出す候より別蒸氣車場迄馬車にて参る
(『徳川照武日記⁸⁾』8月18日)
- ②八時半蒸氣車にてスラーと云所え参り、蒸氣車並に鉄道石炭を掘出す器械其外色(々)之器械有るを見る。此所は欧州にて名高蒸氣車之問屋也と云。 (同上、9月3日)
- ③朝五時に起て半時に食し、六時過ぎに亭を出て汽會所に至る。造築巨大にして美を極むといふべし、(汽車は)宿驛ことに些時休息して出入の客を便す、
(『信恭魯国行用書抜薬⁹⁾』慶応2年2月13日)

4. 名付けの工夫

上述の用例から、宿駅制度を鉄道のシステムに移し替えて理解するのが、海外で鉄道を見た人たちの方法であったことが明らかになった。

では、玉虫左太夫、市川清流以外には幕末の海外使節団の記録に見えない、「トイヤ」に宛てられた漢字表記の「行頭」は、どういう「漢字語」であったのか¹¹⁾。

今、注意されるのは、『尾蠅欧行慢録』の著者市川清流が、前述したように白話語辞書『雅俗漢語譯解』の編者であるということである。『雅俗漢語譯解』に関連する語については【資料9】①～③に示した¹²⁾。江戸時代の白話辞書『小説辞彙』(寛政3[1791]年)には、「行」に【資料9】④のように、玉虫の「行頭」に近い語義が示されている。『中日大辞典』は háng (行) に「卸問屋」の語義を載せる。なお、【資料9】③は語義から「火輪車行頭」にはあたらず、⑤も「行頭」であるが、ここは、「出頭行頭」に対して「旅へ出テユクコト」の語義がしめされているので、例えば、『中国語大辞典』(角川書店)が「地方に行く。遠出する。旅に出る」の意である「出行」に接尾辞の「頭」を付けたものであろう。

【資料9】

- ①行^{カウ} アキナヒノコトヲート云フ、又人ノコトヲート云フコトアリ、
 (『雅俗漢語譯解上』加之部, 69 表)
- ②頭 頭字句頭に在るときは實字。語下に在る時は虚字也。(中略) 快心編に年頭とある
 も唯年の事也。
 (『雅俗漢語譯解上』登之部, 69 オ)
- ③行頭 何ニアレ其場ニ入用ノ器ヲ云机辺ニテ云ヘバ筆墨昏ノ類也。
 (『雅俗漢語譯解上』阿之部, 69 ウ)
- ④(行) 家^{トイ} / (行) 戸家^{トイ} / (行) 戸中^{トイ}ナカマ (『小説字彙¹³⁾』20 ウ)
- ⑤(出) 頭行頭^{旅へ出テ}エタコト (『小説字彙』14 下オ*「出」の掲出字の項)

明治四年の岩倉具視使節団の記録である『米欧回覧実記』では、【資料10】①のように「ステーション」と振り仮名を振って「駅^{ステーション}」を用いている¹⁴⁾。

【資料10】

- ①夫ヨリ鉄道ノ新驛ニ至ル、蓋シ「シュワルト氏ノ建築セル所ナリ、米國ノ鉄道ハ建築
 ヲ粗ニシテ、簡便ヲ尚フ、故ニ駅^{ステーション}ノ屋造モ亦粗大ニシテ、多クハ木製ノ厩舎ヲ建テ、
 雨露ヲ防クニ止ルノミ、此新驛ノ造營ニ至リテハ、宏大精麗ヲ盡シ、哀然タル大建築
 ナリ、
 (19 巻 3 月 7 日、『実記(一)』)
- ②故ニ「ミンスター」駅ヨリ、西ニ駛行スレハ、鐵路ノ駅^{ステーション}ニ、石炭ヲ堆積シ、荷車累
 累トシテ、鐵軌ノ淤旋ニ連リ
 (56 巻, 3 月 7 日、『実記(三)』)

「站」は、現代中国語で日本語の「駅」を訳した語として、我々の目に触れている「漢字」語である。この語は『中国語大辞典』(角川書店)によれば、旧白話語であることを示す記号が付けられて「駅伝の駅。宿場」とある。また、同書には「站頭」が熟語としてあがっていて、①として宿場の意味とされ、②として方言には「頭」が接尾辞化して駅の意味を持つものがあることが記述されている。「駅^{ステーション}」は『海国図志』に「以六人專司會議、其餘或理外国事宜、或理案件、或理駅^{ステーション}、或理因底阿人事件(以下略)」(巻 60-6 ウ)とあり、文脈からは「公文の引き継ぎ官吏の休息所」(『中国語大辞典』角川書店)を指したものである。つまり、『米欧回覧実記』の筆者久米邦武も玉虫、市川などと同様、鉄道ターミナルを宿駅制度に比して表現したのである¹⁵⁾。

飛田良文・菊田悟編『和英語林集成 初版 訳語総索引』(笠間書院, 1996 年)を手がかりにして、明治学院大学『和英語林集成』デジタルアーカイブスで検索すると、1867(慶応3)年に出版されたヘボンの『和英語林集成』初版、1872(明治5)年の再版にはなかったが、第三版(明治19[1886]年)「英和の部」に“STATION”の見出し語があり、そのなかに“Railway —, teishajo”がみえる。しかし、「和英の部」の見出し語には“teishajo”はない。

問題にしてきた鉄道施設をいうのに、明治中期以降に至って、今日の「駅」が使われ出し、(明治三十年代になると。(略)「駅」がこの鉄道の停車場を表わすものとして使われ始め)、(明治後期から大正にかけて、「駅」は次第に「停車場」を圧倒して)いくことになる¹⁶⁾のである。

5. まとめ

繰り返すことになるが、玉虫、市川の見聞記に見える「行頭」は、蒸気車が発着、数十輦留置されているところを、人や荷物を運送する蒸気車を馬に擬して、日本の宿駅制度の中にみえる「問屋」としてとらえて、白話語辞典が「トイヤ」にあてている「行」に接尾辞「頭」を付して白話語風に造語したものと思われる。『米欧回覧実記』の「渡頭」（『実記（一）』256頁）、『仏英行』の「港頭」（9月20日）も同様と思われる。『尾蠅欧行慢録』9月28日の条にある「馬頭」には「ハトバ」の振り仮名があり（豊橋市立図書館蔵本）、『坤輿図識』¹⁷⁾には「馬頭」にミナトの振り仮名を付けた例（巻45オ）がある。接尾辞「頭」を用いたのは、白話語の「馬頭」によったものと思われる。船が停泊して、人や貨物を積んで出発するところと鉄道のターミナルステーションは同一の機能を持ったところであったからであろう。白話語の常套的な表現である接尾辞「頭」を用いたのは、『航米日録』に「管店子」「導舟子」などと接尾辞「子」を用いた語群¹⁸⁾と同様の造語法であったと考えられる。「行頭」は、上述の『中国語大辞典』（角川書店）にある「站頭」の「站」を「行」に換えたという解釈も成り立つが、「站」よりも「行」が身近にあった用字と考えて、「行頭」の、造語を上記のように捉えた。

「駅」「停車場」が一般的な語でなかったときに、「火輪車」が、高い建物の傍に数十両留め置かれて、そこから四方に向けて出発する鉄道施設を前にして、幕末の知識人のなかには、彼らの語彙にあった白話語—それは彼らがなじんでいた古典漢文にある漢語ではなく、当時の中国語＝外国語であった—、あるいは、それらしく造語した語を用いたことを述べた。いわば、それが彼らの近代語であったと捉えるのである。

注

- 1) 山口廣次「パナマ鉄道余話—幕末遣米使節の記録を読んで」（『鉄道ファン 308号』交友社、1986年12月）に、パナマ鉄道の路線図、玉虫等が乗った当時のレールが示され、山口氏は『航米日録』のレールの記述は正確であるとされている。
- 2) 『航米記』。本文は1974年に新潮社から刊行された複製によった。同書の松本雅明氏執筆の解題では、「原本（もしくは原本の一つ＝他の一本は藩公に献上したか。ただし、現在、細川家北岡文庫にはない）が発見され」とある。
- 3) ジャパンナレッジのサイト（<http://www.japanknowledge.com/stdsearch/displaymain>）にある『日本国語大辞典』によった。
- 4) 宿駅制度を『国史大辞典』（ジャパンナレッジのサイトによる）は次のように記述している。
近世の宿駅において、人馬の継立、御用旅宿の手配をはじめとする宿駅業務を取り扱う施設。伝馬人足の継立を主とするが、商品物資運送の取扱いにもあたる。問屋会所・人馬会所・馬借会所・役前所と呼ぶ宿駅もある。維新时期には伝馬所と呼ばれ改められた。
- 5) 神田学会「KZNDアークイブ」神田仮想現実図書館48、中西隆紀「江戸城・竹橋の極秘イベント—ペリー献上の汽車が走った」に、〈（嘉永七年）五月二十三日、將軍以下幕府首脳の前で竹橋御藏地において披露されたと『日本国有鉄道百年史』は語る。〉とある。
- 6) 豊橋市図書館羽田文庫本には、出港した12月22日の条に、右ルビで「第」に「ヤシキ」、「篙夫」に「センドウ」、左ルビで「噴烟」に「ケムダシ」、「圍房」に「セツイン」などの振仮名が見える。ただし、市川清流の原本にあったかどうかは不明である。なお、『航米日録』では「圍房」には「カワヤ」と振

- り仮名がある。豊橋市図書館羽田文庫本は、以下の URL にある PDF ファイルによった。http://www.library.toyohashi.aichi.jp/pdf/100787456_01-02.pdf
- 7) 佐伯富編『雅俗漢語譯解』（同朋舎, 1976 年）の入矢義高氏による解題では、江戸時代の白話語辞典『俗語解』をもとに『雅俗漢語譯解』を編纂したものという。
 - 8) 『支那小説字解』は、『唐話辞書類集 15 集』（汲古書院, 1973）によったが、大正期の写本である。『支那小説字解』「居処」には、つぎのような宿駅制度に関係する語が見える。「駅遞起人夫 宿ツギニ人夫ヲ出ス」「駅遞 トヒヤ」「館驛 ホンジン」。また、「地理」に「一站々 宿次ノコト 站ハ十五里ニ一処ノ宿ツキナリ 人ノ立カ、リタル字義ニテ御飛脚ナドノ待テ居ルコト」とある。
 - 9) 宮地正人監修、松戸市教育委員会編『徳川照武幕末滞欧日記』（山川出版, 1999 年）による。
 - 10) 内藤 逐『遣魯傳集生始末』（東洋堂, 1943 年）による。「信恭魯国行用書拔藁」は、慶応元年にロシア留学生として日本を発った山内作左衛門（諱・信恭）が、父親に宛てた書簡の集録である
 - 11) 考察の前に、市川の『尾蠅欧行慢録』が、先行文献である玉虫の『航米日録』に学んだのかということが問題となってくる。『航米日録』は都立日比谷図書館蔵本には文久二年に対校したという書写の日付がある（日本思想大系解説）ので、早くに流布したのであろうが、『航米日録』の写本を、帰国後の市川が見たという確証はなく、本稿では別々に「行頭」を用いたと考えて論を進めた。
 - 12) 前掲 7) の佐伯富編『雅俗漢語譯解』によって検索した。本文は近代デジタルライブラリーによって示した。
 - 13) 流布本である、題箋「小説字彙」、内題「畫引小説字彙」、奥書「寛政三年辛亥十一月、皇都書林 風月莊左衛門、大阪書林 渋川與左衛門、同 泉本八兵衛、同 山口又一郎」とある架蔵本によった。
 - 14) 『米欧回覽実記』の調査は岩波文庫によったが、本文の引用は、近代デジタルライブラリー・博聞社版『特命全權大使米欧回覽実記』によった。
 - 15) 幕末に海外に派遣された武士の記録に「站」がみえないことについては、「站」の位相についての考察が必要と思われるが後考を待ちたい。
 - 16) 真田信治氏「えき（駅）」『講座日本語の語彙 9 語誌 I』（明治書院, 1983 年）
 - 17) 長野電波技術研究所附属図書館蔵の弘化二年の刊期がある美作夢霞樓蔵版によった。
 - 18) 拙稿「『航米日録』の漢語語彙一巻一を中心にして」（『国語語彙史の研究 32 集』和泉書院, 2013 年）

[引用文献]

- 石井研堂（1944）『改訂増補明治事物起源』（春陽堂）〔筑摩学芸文庫『明治事物起源五』（1997 年）によった〕
- 沼田次郎（1974）校注『航米日録』（日本思想大系、岩波書店）
- 宮永孝（2005）『万延元年の遣米使節団』（講談社学術文庫）
- 森岡健二（1991）『改訂近代語の研究 語彙編』（明治書院）、第四章「翻訳書に与えた英華字典の影響」

[参考文献]

- 太田辰夫『中国語歴史文法』（朋友書店, 1981 年 * 1958 年江南書院版影印）
- 香坂順一「近世・近代漢語の語法と語彙」（『中国文化叢書 1 言語』大修館書店, 1967 年）
- 香坂順一『白話語彙の研究』（光生館, 1983 年）

[引用図の所在]

- 図 1 : <http://ushistoryimages.com/images/baltimore-1861/fullsize/baltimore-1861-3.jpg>
- 図 2 : http://commons.wikimedia.org/wiki/File:President_St_Depot_%26_City_Block_-_Baltimore_1869.jpg
- 図 3 : http://en.wikipedia.org/wiki/Camden_Station

見聞記『航米日録』に見える「行頭」をめぐって（浅野）

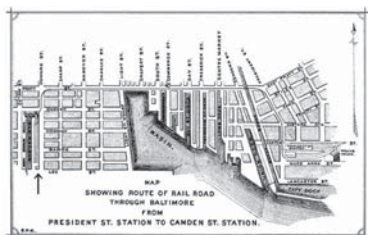


図 1：カムデン駅



図 2：ブレジデント・ストリート駅



図 3：1865 年のカムデン駅

付記：本稿は、第 64 回中部日本・日本語学研究会（2013 年 5 月 18 日、於刈谷市産業振興センター）において発表した「幕末武士の近代語—『航米日録』に見える「行頭」をめぐって—」にもとづき改稿したものである。席上いただいたご質問、ご教示に感謝いたします。また、『航米日録』の閲覧については、仙台市博物館の学芸員、事務の方にお世話になった。記して感謝の意を表します。

なお、本稿は 2013 年度立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究助成プログラムによる成果の一部である。

